調和体における方形作品の構成

歳森芳樹
Yoshiki Toshimori

今回は方形作品に取り組んだ。方形作品の構成方法は幾種もある。私見だが方形は縦横比が同じなので各々の方向への広がりを感じにくく、内に向かうという印象がある。この私見を本に本作品を制作した。

この構成の核となるのは「中心に向かう」という点である。この中心部を効果的に表現する詩文を選ぶことから始めた。選文は、文字数に制限があり吟味された語句で感情を表現する俳句が最適と考え、それを対象とした。

方形の俳句作品といえば先ず思い浮かぶのは仮名の散らし書きであろう。今回は、漢字作品の一行に書けるところまで語句を書き改行するという構成法を使用する。

選んだ俳句をこの構成法で行に入れる文字数を変えながら草稿を作る。実制作では、紙面の中心部に表情のある漢字を配し、それが際立つ表現となるよう墨の潤渇、文字の大小、筆の開閉等を加味し取り組んだ。

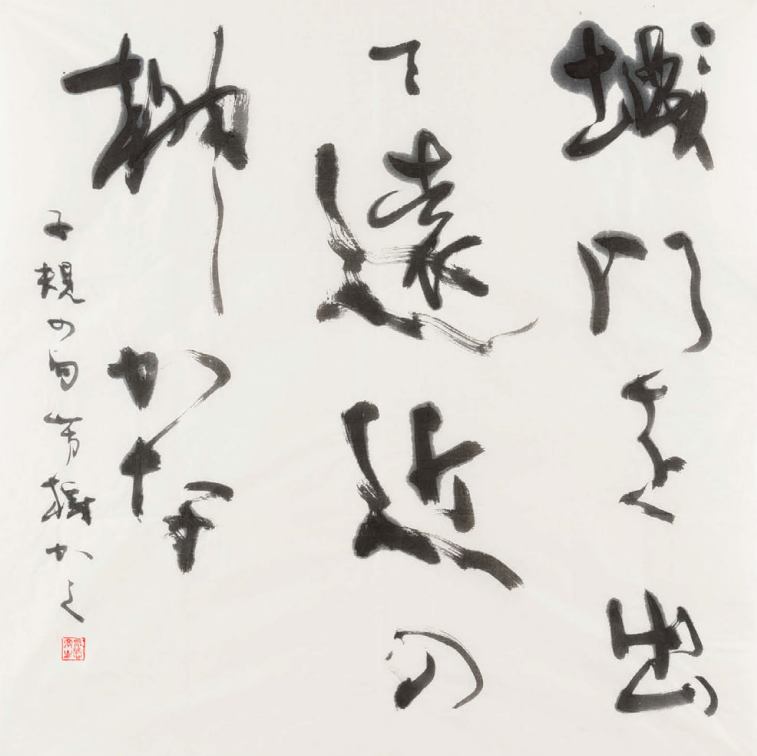
本作は、書き出しの滲みと中心部の擦れが印象的な表現となるよう淡墨を使用。一行目の文字の大きさを抑え中心部との差を持たせる。三行目の長く伸びた縦画。これらは文字の大小と長脚が空間に大きな変化をみせる。中心部の「遠近」二字は、潤渇、大小、開閉等の変化をこの二字で強調することにより視覚的な効果をより高める等「内に向かう」視線や意識を捉えた表現を少しは感じることの出来た作となったと思う。がまだまだ様々な角度からの研究、取り組みが必要と痛感した作ともなった。

・用具用材

筆…兼毫筆

紙…台湾画仙

墨…和墨



82.8×82.8㎝

城門を出て遠近の柳かな（正岡子規）